

関連学会印象記

第1回国際内毒素学会に出席して

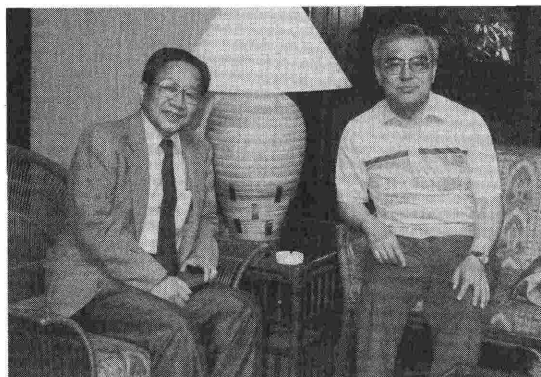
有田 英子*

第1回国際内毒素学会 (THE FIRST CONGRESS OF THE INTERNATIONAL ENDOTOXIN SOCIETY) が、1990年5月10日より12日までの3日間、アメリカのサンディエゴ市 Catamaran Resort Hotel で開催されました。2年前の1988年5月には、日本の自治医科大学において、微生物学教室中野昌康教授が中心となられ INTERNATIONAL SYMPOSIUM ON ENDOTOXIN が開かれており、今回の学会は実際には第2回と言ってよいものでした。世界各国から447人の医師や研究者たちが集まりましたが、日本人が45人もおり、現在の日本の力を感じさせられました。各国の中で2番目に多い人数だったようです。

さて、サンディエゴ市を訪れるのは私にとっては2回目のことでしたが、非常に美しい町で、今回も大変楽しく充実した数日を過ごすことができました。天気は思ったより悪く、雨は降りませんでしたが午前中はいつも肌寒い毎日でした。どうやらサンディエゴでも異常気象だったようです。しかし、太平洋と Mission Bay の間にあるホテルの、11階の部屋からの景色は最高で、(幸いにも私はホテルの11階の海側の部屋を与えられました。) 海と海岸が本当に美しいでした。

学会はレクチャー47とポスター約300に分かれており、抄録を投稿した人は全てポスター発表になりました。レクチャーは、7つのセッションに分かれており、その内容は 1) NEW KNOWLEDGE ON THE CHEMISTRY OF ENDOTOXINS, 2) MOLECULAR BIOLOGY,

STRUCTURE AND FUNCTION STUDIES, 3) REGULATION OF CYTOKINE RELEASE BY ENDOTOXIN, 4) MECHANISMS OF IMMUNOMODULATION BY ENDOTOXIN, 5) PHYSIOLOGIC ACTIONS OF ENDOTOXINS, 6) RECOGNITION OF ENDOTOXIN IN BIOLOGICAL SYSTEMS, 7) PATHOPHYSIOLOGY OF ENDOTOXIN ACTION でした。題からもわかるように内容は多岐に渡り、しかも濃く、かなりのものは私にとって難しいものでしたが、なかには私が現在行っている実験内容に比較的近く、大変役立つものもあり、時差ボケを克服しようと努力しながら一生懸命ノートを取りました。レクチャーを行なわれた日本人は、大阪大学理学部の楠本正一教授、昭和大学薬学部河西信彦教授、自治医科大学微生物学教室の中野昌康教授(発表順)の他2名の計5名でしたが、この人数は、中野教授が中心となられて本学会の為に貢献している、日本人の貢献度からすると少



中野昌康教授(向かって右)と河西信彦教授
Catamaran Resort Hotel のロビーにて

*東京大学医学部麻酔学教室

ないので、次回からはもう少し日本人によるレクチャーの数を増やす運動をしようという話がありました。日本人はどうしても控えめで、損をすることもあるようです。ポスターの数は膨大で、1日約100題、3日で300題も掲示されましたが、1日目など出していない人もおり、ずいぶんいい加減な人がいるのには驚きました。しかし、多くの人々が非常に熱心に見てまわっており、基礎系の医師及び研究者が多くを占める本学会での、研究に対する参加者の情熱が強く感じられました。私のポスターは第1日目の掲示となりましたが、何時から何時まで質問を受けるようにというような指示が何もなかったので、気楽に他のポスターを見てまわったり、レクチャーを聞いたりして過ごしたところ、日本に帰ってからはしばらくして、あるアメリカの教授よりお手紙を頂き、質問したかったのにあなたが見つからなかったといううれしいお叱りをいただきました。それほど私のポスターに関心を持って下さったことに感謝し、丁寧な返事をお送りした次第です。

さすがに国際学会だと思ったのは、2日目の午後がフリーになっており、しかも希望者はツアーで Sea World か San Diego Zoo に行けるようになっていたことです。学会参加者の多くが、どちらかのツアーに参加したようでした。私は San Diego Zoo に行きましたが、この動物園は世界一大きく、とても歩いてまわってはいられないので、2階建てバスに乗ってぐるっと一回りし、それで見られなかった細かい所を改めて見てまわりました。

その夜には、ホテルのすぐ横の波打ち際で、晩餐会がありました。砂浜にいくつものテーブルと椅子が並べられ、自分達でお皿に好きな食物を入

れてきては、美しい海を眺めながら、そしてテーブルが同じになった方々とお話をしながら楽しくいただきました。食事はアメリカにしては大変美味であったように思います。私は、自治医科大学の四宮博人先生、中野康伸先生と同じテーブルにいましたが、そのテーブルに Circulatory Shock のエディターをしていらっしゃる Dr. Hinshaw と Dr. Filkins がいらっしゃり、親しくお話しさせていただいたのは大変うれしいことでした。Dr. Hinshaw はその次の日にも私の所においでになり、“お会いできてよかった。どうぞお元気で。”というような意味のことをおっしゃってくださいました。学会ではいろいろな人と知り合いになることが発表を聞くより大切なこともあり、特に国際学会では普段簡単にはお会いできない方々にお会いしたり、お話ししたりすることが気軽にできるので、貴重なチャンスだと思います。私自身は、現在私が行っている実験の方法に大きなヒントを与えてくれた Dr. Spitzer にもご挨拶ができ、とても満足でした。

最後の夜には、日本人ばかり約17名が、ラ・ホイヤビーチのレストランに集まり、楽しく賑やかにお別れの食事をしました。その中の多くの先生方は、渡米時の飛行機でもごいっしょさせていただいたので、すでに存じ上げていましたが、皆様大変よい方々で、初めてお会いしたとは思えないほどでした。ここに、日本においてエンドトキシンの研究をされている先生方のますますのご発展をお祈りいたします。また、たった一人で参加した私をいつもあたたかく守って下さり、観光などにもお連れくださいました、自治医科大学微生物学教室の中野昌康教授、四宮博人講師、中野康伸先生に深謝いたします。